各界からのメッセージ

参議院議員、元滋賀県知事
元 京都大学経営協議会委員

嘉田 由紀子 かだ ゆきこ

探検大学京大の面目躍如、山極さんの次なる探求心は地球環境問題へ

2020年、コロナ禍と地球環境問題。いずれも人類として科学的にも社会的にも答えをもっていない問題に直面する時代。だからこそ探求心あふれる京大魂をバックに、京大総長としてゆるぎない姿勢を示した山極さんは後世に残る総長となるだろう。

日本政府は、自分たちの政治方針に反対する科学者を排除しようと、日本学術会議のメンバーの選別をした。山極さんは学術会議前会長として、「民主主義国家でアカデミアの人事に今回のような国家の露骨な介入を許している国はない」と毅然と意思表示。あっぱれだ。私自身も40年も前になるが滋賀県立の琵琶湖研究所の研究の自由を当局に交渉し、今もその体制は担保されている。残念ながら日本国を背負う政府が自治体以下ということだ。

コロナ禍に対して、山極さんが強調したのは、霊長類の進化の過程から人間らしさの原点を「共感力」と表現。「新型コロナウイルスは、人類が進化の過程で獲得してきた人間らしさを揺さぶっている」という。科学や学問の自由と価値を認めようとしない日本政府に、人類として未知のコロナ禍や地球環境問題に対策を打てるはずがない。残念だ。

そんな時代だからこそ、京都大学の未知の世界を探求する研究と学生育てに期待したい。6年前の2014年、山極新総長に京大の運営に関わってほしいと運営委員をお引き受けした時に、WINDOW構想におおいに共感をして応援させてもらった。Wild and Wise、International and Innovative、Natural and Noble、Diverse and Dynamic、Original and Optimistic、Women and Wish。

実は山極総長とは、1970年代、彼が学部生の時代から京大アフリカ研究会などでご一緒する機会があった。伊谷純一郎門下で、関東弁を話す仲間として気安かった。その彼が、ゴリラと会話できる唯一の人類としてテレビ番組の主役に！まさに野性的で、国際的で、同時に貴族的で、多様性あるダイナミズムを内面化。それが実現できたのは楽観的な自信ゆえか。最後のWomen and Wishは、子どもや家族のあり方を追及してきた山極イズムのやさしさだろう。

来年度からは総合地球環境学研究所の所長として、まさに山極イズムで、人類の危機に挑戦する研究集団をひっぱっていただく。次なる探求心の発露に期待したい。

京都府知事
京都大学経営協議会委員

西脇 隆俊 にしわき たかとし

学生や研究者が世界・地域で活躍できる「窓」京都大学

山極先生が京都大学の総長に在任された6年間は、社会構造や人々の価値観が大きく変化した激動の時代でありましたが、その間、霊長類の研究者として国際的に多大な功績を上げてこられただけでなく、総長として、大学を社会や世界に開く窓として位置づける「WINDOW構想」を掲げ、有能な学生や若い研究者の能力を高め、世界で活躍できる、多くの優れた人材を輩出されてきました。

私は、京都大学の経営協議会委員として、大学の運営状況をお聞かせいただいてきましたが、特に印象深いのは、構想のテーマの一つである「DIVERSE AND DYNAMIC（多様性の受け入れと落ち着いた学問の場の提供）」に基づく、大学の教育・研究環境整備に係る取組でした。令和元年9月に京都大学百万遍国際交流会館の披露式で、山極先生とご一緒させていただいた際にも、「研究者や学生が、よりよい社会の実現にともに挑戦していくことができるような環境整備に引き続き取り組んでいく」という決意を述べられ、昨今のコロナ禍においても、学生が経済的理由で修学・進学を断念することのないよう「緊急学生支援プラン」を策定されるなど、積極的に学生を支援されているところであり、こうした姿勢が顕著に表れたものであると感じております。

さらに、意欲ある学生や研究者が、困難な課題に果敢に立ち向かい、新しい時代を切り開く人材として大きく成長できるよう、国内外でのフィールド学習の充実にも取組まれてきたところであり、京都府における、地域と大学との連携にも、深い御理解と御協力をいただき、改めて、深く感謝申し上げる次第です。

今後とも健康にご留意の上、ますます御活躍いただき、引き続きお力添えをいただきますとともに、今後も京都大学が開かれた「窓」として、世界や地域との連携を一層深めていただけるようお願い申し上げます。

京都市長
京都大学経営協議会委員

門川 大作 かどかわ だいさく

山極壽一先生の御功績、人間力に敬意を込めて

ゴリラのリーダーは泰然として動じない。思慮深く、その風格は多くの者の心を惹きつけてやまない。私は、尊敬する山極壽一先生の高い見識、人間力、生き方、リーダーシップと重なるものを感じています。（失礼）

改めまして、山極壽一先生、教育者、研究者として、また、総長として、京都・日本の宝である京都大学の発展のため、また、学問・教育を通じた、幅広い社会的課題解決への御貢献と御功績に心から敬意を表します。

私が教育長を務めていた頃から、教職員やＰＴＡへの研修等で素晴らしいお話をお聞かせいただき、高い志と極められた専門性、幅広い学識、さらに、それを実に分かりやすく（おもろく）語りかけられるお姿に、深く感銘。

人類学・霊長類学を極められた学識で、人の生き方、社会の在り方、教育などを説かれる山極先生のお言葉には、実に説得力があり、偉大な京大総長、国大協会長、日本学術会議会長として、日本の大学・学術研究者の顔としての偉大な存在感を示されると同時に、地元京都においても、京都市動物園の学術顧問として「生き物・学び・研究センター」の創設（おかげさまで京都市動物園には6人の博士が誕生）、京都駅東部・崇仁地域へ移転する京都市立芸術大学との連携強化等に幅広く御貢献いただきました。

また、京都大学と締結した「国際学術都市としての魅力向上に関する連携協定」に基づく連携強化により、京都市では、国際会議の開催件数が６年前と比べて2.2倍（年間391件）となり、留学生数は１万４千人を超え、新たに創設された京大の観光MBAコースでは、日本・世界の観光のあるべき姿を探究する担い手が育たれ（コロナ禍で非常に注目）、さらにコロナ禍においても本市と包括協定を結び、感染拡大防止対応いただくなど、山極先生の御功績は枚挙に暇がございません。

思い出深いのは、文化庁の移転を国に要望していた際、馳浩文科大臣（当時）が京都に視察に来られ、山極先生と私等との協議・懇談の場において、山極先生が文化庁移転の意義を熱く語られ、機知に富んだ勧説で、その場を極めて有意義なものにしていただいたことです。いよいよ文化庁京都移転が実現します。

総長を御退任後、引き続き京都の地を拠点とし、総合地球環境学研究所所長として、人類最大のテーマである環境問題、2050年CO_2ゼロへ真正面から御献身。心強い限りです。

ゴリラのリーダーの偉大な背中、シルバーバック、格好いいです。その背中は、山極先生が人類と地球の未来を背負って歩まれる姿に重なります。

祈。益々の御活躍と御健勝。

株式会社サキコーポレーション ファウンダー
前 京都大学経営協議会委員

秋山 咲恵 あきやま さきえ

新しい時代に向かって開かれた窓

山極総長時代の６年間、私は京都大学経営協議会委員として大学経営に関わり、また京都大学鼎会理事として総長の活動をサポートさせていただく貴重な機会を得ました。

自分で民間企業を創業し経営してきた私にとって、国立大学経営の現場は全くと言っていいほど異なる景色でした。財政面においても運営面においても、民間人の感覚からは、経営の自由度に制約事項が多く、経営手腕を発揮するには難易度がたいへん高く感じていました。その中でビジョン実現に向けて多くの挑戦を重ねてこられた軌跡には、改めて敬意を表します。

激務である大学総長に加えて、国立大学協会会長、そして日本学術会議会長と前人未到の重責を重ねられるに連れて、山極先生と東京でお目にかかる機会が増えていきました。

京都大学東京フォーラムや京都大学東京オフィスでのご講演、鼎会メンバーとの精力的な対話の場など公務の合間にも勢力的な情報発信に努めておられたのが印象的でした。

大学を取り巻く環境が大きく変化する時代に、最も人と情報の集まる場所に自ら赴き、多くの学外の方々との対話を重ねる姿は、大学から外に向かっての、そして未来に向かっての窓を開こうとされているようでした。

ある時、東京神保町交差点近くにあるこじんまりしたカフェ、―そこは岩波書店の本に囲まれてゆったりとコーヒーが飲めるお気に入りの場所の一つなのですが―、そこで、偶然にも山極先生の姿をお見かけしました。ご立派な肩書からすれば、少し驚きを感じるような場所で。お声かけすると、少しはにかみながらご自身がお話しされる講演のチラシを下さいました。いつでも、どこでもフラットに人と接してくださるその姿勢は、森でのゴリラ観察を通じて培われたものなのかも知れません。そんな山極先生が日本を代表する権威ある組織というジャングルで、人間という生き物をどのように観察し、どのような考察をされたのか、いつかぜひともお伺いしたいものです。

山極先生が開かれた窓から、新しい時代に向かって、京都大学がさらなる存在意義を発揮されることを楽しみにしております。

内閣府総合科学技術・イノベーション会議常勤議員、政策研究大学院大学客員教授

上山 隆大 うえやま たかひろ

山極先生との思い出

山極先生と最初に言葉を交わしたのは、文科省が指定国立大学制度の検討を始めた際、主だった研究大学の学長・執行部からヒアリングを行う会議だった。その場で私が「国立大学も民間からの資金を積極的に導入すべき時ではないですか」と問うと、「京都大学はそんな品のないことはしません」と怒鳴るように一言おっしゃった。やっぱり京都はいいなぁと内心とても嬉しくなった。ところが指定国立制度が始まると、どこの大学よりも前のめりになって、最終的には一番で採択された。今では京都大学は大学発ベンチャーのメッカの一つになりつつある。京都のお生まれではないのに風儀がいかにも京都らしい。

山極先生には、議論の際にまず激昂して相手を言葉で一発殴ってから、徐々に穏やかになって合意に達しようとする癖がある。私の背後にはゴリラが居ますとつねづね仰せなので、ご自分の研究から会得した人間関係構築の奥義なのかもしれない。

3年前の10月、山極先生が日本学術会議の会長になられ、総合科学技術・イノベーション会議に参加されるようになった。その最初の会議をいまもある種の可笑しみを持って思い出す。山極先生の伝統的な大学観に「先生の論にはアカデミアへの愛が感じられない」と言った途端、「お前の正体はわかったぞ」と大喝された。その後1時間近く、他の議員はそっちのけで二人の激論になった。内閣府の会議は曲がりなりにも政府の公の場である。山極さんらしいな、と小気味よい後味が残った。

その後、何度か食事をした。多くのご友人もご存知のように、愛すべきお人柄である。笑顔に並外れて魅力があるので、少々こじれても笑えば最後は分かり合えると思っておられるのだろう。怒ったり笑ったりを繰り返す。このあたりは生粋の京都人とは違う。

山極先生のアカデミアへの愛、というよりも「知られていないことを知りたい」という好奇心への愛は本物である。京都大学総長の6年間を終えて静謐の学究に戻られる山極さんを羨望の思いで、東京の喧騒のアリーナから眺めている。

東京大学名誉教授、元 日本学術会議会長

大西 隆 おおにし たかし

山極先生、ひとまずお疲れ様でした

6年間の激務お疲れ様でした。引き続き元気でご活躍いただきたいと思います。

私が、山極壽一先生の知己を得たのは、比較的最近のことになる。東大での教員生活も終盤になり、少しのんびりした研究生活に入ることになるのかなと想像していたら、思いがけずに日本学術会議の会長に選ばれ、しばらくして、それまでほとんど縁がなかった豊橋技術科学大学の学長になった。私にとっては予想外の人生の展開であったが、これも何かの巡り会わせと受け入れていた。山極先生も、私よりは確度の高いコースだったのであろうが、京大総長、学術会議会長の職に就かれた。接点は、2015年に当時の国立大学協会会長の里見進東北大総長から、ともに副会長に指名されたことだった。山極先生は2年後に協会の会長に選出されることになるが、それまでの2年間に協会の総会、理事会、その他の打ち合わせで頻繁にお目にかかることになった。

さらに、先生は、2017年10月から、日本学術会議の会長に選出された。ただ、私は前任者として退いた後だったので、学術会議における接点はあまりなかったといった方がいいのだが、今や、歪んで伝えられる傾向がある学術会議について正しい情報や、あるべき姿を主張するという観点で同じような立場に立たされている。

学術会議の70年余の歴史を振り返ると、双方がどれ程それとして意識していたのかは別として、“政府との戦い”、その結果としての改革の連続であったともいえる。当初持たされていた、科学技術予算や主要な国家的研究機関設立に関する勧告、科研費の審査や配分、科学技術関係の政策提言といった任務が客観的に見ても過大であったことを主たる理由として、その役割を他に渡していくことが改革の内実であった。しかし、全てを放棄してしまっていいわけではない。物事の真理を知り、共有することで、合理的な社会を築こうとする科学者の自立的な役割は、現代社会を構成する重要な要素であると思う。学術会議の会長時代に訪れたイタリアの科学アカデミー・リンチェイで渡されたWiFiのパスワードは1603だった。世界最長の歴史を誇るこの組織の設立年である。図書室に残された当時の会員名簿にはガリレオの名前があった。科学を確立した先人の、真理に忠実であれとの教えを忘れないための番号のように思えた。

株式会社三井住友フィナンシャルグループ名誉顧問
京都大学総長顧問、京都大学法学部有信会会長

奥 正之 おく まさゆき

山極総長 本当にご苦労様でした

第26代京都大学総長選考が行われたのは2014年の初夏。丁度その春に、文科省の中央教育審議会大学分科会で議論されてきた「大学のガバナンス改革」の纏めが発表されたこともあり、私は、学外監事を務める立場上、総長選考過程を強い関心をもって見守っていました。結果として、今まで理事あるいは経営協議会委員という大学マネジメントの経験の無い山極壽一候補が、意向投票及び決選投票を経て総長候補者に決定されたのは、やや意外というのが正直な感想でした。

然しながら、総長就任後、引き続き監事として、また、京大OB財界人による総長支援団体「鼎会」の会長として接する機会を得てみると、その意外感は忽ち払拭されました。加えて、総長が、私の生まれ故郷長野県上田市が生んだ知の巨人、人工癌の研究で大正時代に我が国初のノーベル賞受賞を期待された東京帝国大学の山極勝三郎医学博士、の縁者にあたられると知り、一挙に距離が縮んだ気がしました。

就任翌年には、12のKey Wordの頭文字をとった「WIN DOW構想」を提唱し学内に新風を吹き込まれたほか、「大学をジャングル」に見立て、多様性の受容、共存・共生・交叉等を通じて新たな発想が紡ぎだされる大いなる可能性を訴えられました。これは、アフリカでゴリラと共生された経験を持つ山極総長ならではの刺激的な発信でした。

一方、「鼎会」活動についても、「おもろい」を原点とする体験型海外渡航支援制度「おもろチャレンジ」を創設し、グローバルマインデッド人材の養成に努められる一方、「チャレンジコンテスト」では、京大生の尖がったユニークな挑戦意欲を積極的に支援頂く等、学生の行動の幅と厚みが増してきています。

変化が激しく動きの速い時代に、6年間の学内外の学務・公務の舵取りの激務、誠にご苦労様でした。どうかご退任後も、指定国立大学法人としての京都大学に期待される「人文・社会科学系の学問の牽引」について、文理融合の観点から是非とも指導役を果たして頂くようお願い致します。

内閣府総合科学技術・イノベーション会議非常勤議員、富士通株式会社理事

梶原 ゆみ子 かじわら ゆみこ

知への誇りと共感
総合科学技術・イノベーション会議でご一緒して

山極先生に初めてご挨拶したのは、2018年の3月1日、内閣府の会議でした。アカデミアに関する前提知識の少ない私は、不安ばかりの初日の会議で大きな衝撃を受けました。何が起きたかを記すことをお赦しください。

その会議で、私は山極先生と対面で着席していました。私と同じ側に座った他の議員から大学改革の議題説明が終わったとき、突然、先生の「アカデミアに対して愛が無い、金太郎飴をつくるのか！」というご発言から、激しい意見の応酬が始まりました。私は「大変な会議に参加することになった！」と目が点です。後日、この会議が実質的で活発な議論をし、他の会議体には類のない特徴があることを知るのですが、衝撃と先生の熱い愛を知ることが、私の初日の洗礼となりました。以来、毎週木曜日の会議でご一緒し、いつも最初に発言される先生の反応の速さ、そして、「はい！」と手を真っ直ぐ挙げる少年のような姿がとても印象的でした。

2年半に亘り、アカデミアの知への誇りに接すると共に、多様性を尊ぶ姿勢、特に、地域への視点や文化を置き去りにすべきでないことや、デジタル化が進む中、人にしかできない「目を見て相手の気持ちを読む」共感力、身体に根差した仲間と分かち合う幸せな時間を保てる社会、そして文理の境界を越えた深い教養の大切さなど、多くのことを一緒に考えさせていただきました。

日本学術会議の企画での先生とのオンライン対談もとても光栄でした。産学が互いを理解し合い、より良い社会作りに向け連携すべきだという意志を改めて強くしたところです。自社のパーパス（存在意義）の重要な価値観を「共感、信頼、挑戦」と定義した私には、先生そのものがそれらを体現していると感じました。

最後に打ち明けます。みやこめっせでの卒業式と学位授与式に、保護者として参列し、3センチサイズの山極先生からの式辞「研究者としての誇りを活かし光り輝く人生を」を拝聴しました。そんな縁もあったことをお伝えしたく、またどこかで縁が繋がることを願っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

株式会社日立製作所代表執行役 執行役副社長
前 京都大学経営協議会委員

小島 啓二 こじま けいじ

産業界とWINDOW構想

山極先生に最初にお会いしたのは2014年になる。京都大学内に日立製作所がラボを設置して、未来の社会課題を解決するための共同研究を行う計画の相談に伺った。この構想は、阿曽沼先生をはじめ多くの関係者のご支援を受け、2016年に「日立京大ラボ」として実現された。本ラボは文理融合型の産学連携研究機関としてユニークな進化を続けている[*1]。この縁があってか、2015年からは京都大学の経営協議会委員として、先生の大学改革に向けたリーダーシップに触れる機会に恵まれた。

山極先生が総長として進めた大学改革は言うまでもなくWINDOW構想に集約される。「W (Wild & Wise)」ではじまるこの改革方針は、狭い範囲でしか通用しないような人や発想を嫌う先生の会心の作と思う。私が特に好きなのが「O (Original & Optimistic)」である。この言葉は大学に留まらずイノベーションに挑む全ての者に勇気を与えるもので、一企業人の心構えとして私自身大切にしている。

WINDOW構想のもと進められた大学と社会の対話の一環として、2019年9月に「産業界が望む大学改革像」というテーマで先生と対談の場を設けて頂いた。日本の経済成長に閉塞感が広がり、大学は産業界で即戦力になる人材の育成に力を入れよという声も強い中、先生も産業界の本音を聞きたかったのかもしれない。「大量生産と大量消費を基本とする高度成長の時代は過去のものとなった。求められているのはイノベーションへの果敢な挑戦を繰り返し、失敗も経験しながら知恵とたくましさを身に着けて組織に成長をもたらす人材」と申し上げた。イノベーション人材育成における、リベラル・アーツや人文社会系の研究の重要性に関する議論で盛り上がった。

地政学的リスク、自然災害、ネットの功罪、パンデミックと様々な社会課題が顕在化し、これまでの常識や常態が変わりつつある。WINDOW構想を再読すると、これらの変化に揺らがない指針となっている。本構想は企業においても優れた羅針盤となるものであり、大いに活用する考えである。先生の構想力に敬服するとともに、今後もその知恵と野生を日本と世界のために発揮されることを願う。

＊1 『BEYOND SMART LIFE 好奇心が駆動する社会』、日立京大ラボ、日本経済新聞出版、2020

日本学術振興会監事、国立民族学博物館客員教授
前 京都大学経営協議会委員

小長谷 有紀 こながや ゆき

伝説のシルバーバック

ご存知の通り、シルバーバックとは、成長した雄のゴリラの背中が白い毛に覆われていることを指す。いわば、ゴリラのパパである。

ゴリラの生態を研究してきた山極さんたちの仕事によって、ゴリラのパパがつねに家族を見守り、見知らぬ存在に対して「それ以上近づくな」と威嚇したり、危険がないとわかると安全宣言したりすることがわかるようになった。メス同士の喧嘩を仲裁することも、無益な争いを避けるための平和提案として胸を叩くこともわかるようになった。さらに、子どもたちとよく遊ぶパパであることも。

山極氏の描くシルバーバックの姿は、まるで山極氏本人のようだと感じているのは私だけではないだろう。多くの人びとがこの男の「白銀に輝く背中」を知っている。

霊長類ヒト科の中でもホモ・サピエンスのシルバーバックには、幾つもの伝説がある。私自身は現場を見ておらず、すべて聞き知ったという点で、それはもはやレジェンド（伝説）だ。

例えば、伝説その一。

2014年夏、京大総長の選考過程において、彼は研究教育に優れているから学内行政に時間を割いて欲しくないという理由で、同氏に投票しないよう呼びかけるビラが大量に構内に貼られたという。こんな理由でネガティブ・キャンペーンが行われるなんてめずらしいにちがいない。管見の限り、初耳であり、今後も、多発することではあるまい。

また、伝説その二。

2017年秋、学術会議会長の選考過程において、氏は過半数を獲得していたにも関わらず、2度も受諾をしぶり、選考に長時間を要したという。会員たちによる承服が正しかったことは、その後の彼の活動から明らかである。

こんな伝説をもつシルバーバックは、もう現れないだろうと確信する。

最後に一言。「白銀の背中」は、それを支えた人たちがいたからこそ輝くことができた。だから、バックアップに徹した先生がたには、とりわけ労いの声をかけたい。お疲れさまでした！

東京大学総長

五神 真　ごのかみ まこと

山極先生のやさしさと勇猛さに触れて

山極先生とは総長任期がほぼ重なったこともあり、様々な場面でご一緒させていただきました。就任初年度には週刊誌の企画で京都大学に伺って対談する機会がありました。そこでは、激動の時代だからこそ、人文社会の学問が重要になると盛り上がりました。人類学と物理学と、分野はずいぶん違いますが、共に理学部出身で理学部長経験者として、学問について共感するところが多いと感じました。また先生は国立市、私は狛江市と、ともに多摩地区という東京でも自然豊かな場所で子供時代を過ごしたことも共通点です。

新聞社系のWebサイトの連載インタビューで、国立大学法人化がテーマになり、山極先生は「国立大学法人化は失敗」と断言されました。その次が私の番で、「法人化は必然」という見出しとなり、耳目を集めました。しかし、二人の主張は「国立大学は公共財」という考えで一致していました。切り込む角度は違っていても、根幹は同じです。山極先生との会話は私にとって常に楽しく安らぐ時間です。昨年５月には、学術会議の会長企画でコロナ禍後の未来社会像についての対談に呼んで頂きました。東京大学が注力している、グローバル・コモンズの考え方に、人類学者としても賛意をいただき、大変意を強くしました。

何より、一番印象に残っているのは、ジャングルでのフィールド調査の話です。２頭の雌ゴリラが調査隊を嫌がって攻撃し、雄が止めに入ってなんとか助かったものの、頭と足を大怪我されたのです。現地の医療は限られており、やむなく麻酔無しで縫合したというのです。この壮絶な話をお伺いし、山極先生のやさしさや柔軟さと共に、ときおり見せる野性的な芯の強さの原点を感じました。

京都大学総長、国立大学協会会長、日本学術会議会長と３足のわらじを履くことになり、本当にご苦労も多かったことと察します。ふたたびフィールドに解き放たれた山極先生の、さらなるご活躍をお祈りいたします。本当にお疲れ様でした。

内閣府総合科学技術・イノベーション会議非常勤議員、
株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役会長

小林 喜光　こばやし よしみつ

ヒューマニティの人

山極先生と私は政府の総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)ではじめてご一緒することになりました。

私は自身の経験から、企業が創出する利益(economics)、イノベーション(technology)、そして社会性や公益性(sustainability)という三つの要素を、時間軸の違いを乗り越えて統合したベクトルこそが真の企業価値であるとの信念を持っています。とはいえ、市場から絶えず業績を査定される企業経営者として、やはり施策の費用対効果や定量性――いわば科学技術・イノベーション政策の資本効率性――を厳しく評価する立場をとらざるを得ません。これに対して山極先生は、真理を探究せずにはいられない人間ならではの根源的な営みとして学問を理解し、それが息づく活き活きとした場として大学の存在意義を熱く語られる姿がとても印象的でした。

このように、私たちの拠って立つところは原理的に異なっていましたが、結果として議論は収斂することが常だったように思います。産学官、都市と地方、国籍、年齢、性別、学問分野――あらゆるサイロやドグマを打破して、徹底的にオープンで、多様性と可塑性に富んだあり方のもとで大学は学知を追求しなければならない。そして、その有形無形の成果はなにより人々のwell-beingや共同体の持続可能性を増進すべく、あまねく裨益されなければならない。要するに、大学であれ企業であれ、「世のため人のため」という心意気はまったく同じであることに、大いに勇気づけられる思いがしたものです。

そのような雰囲気が出版界にも伝わったためでしょうか、「文藝春秋」2020年７月号で対談の機会を持てたこともうれしい経験でした。編集部が「デジタル独裁 VS. 東洋的人間主義」と題したこの対談では、映画『猿の惑星』やイスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリの著作などを補助線として、ウィズ・コロナ、ポスト・コロナの「人間らしさ」について闊達に語り合うことができました。いささか異色の顔合わせではありましたが、これもひとつの脱サイロ化だったのだと感じています。

前 豊田工業大学学長
前 京都大学経営協議会委員

榊 裕之 さかき ひろゆき

山極総長への謝辞と京都大学の発展への期待

6年前、山極総長の下で京大経営協議会の一員となり、大学経営に関与する機会を頂いた。 学生・ 教員として東大で43年を過ごした小生は、京大や東大は我国の大学全体のために貢献する使命があり、そのために総長が働けるよう、学内の方々の支援を望むとの意見を述べてきた。山極総長は、この期待を遥かに超え、日本学術会議会長、国立大学協会会長、総合科学技術会議議員として学界全体に貢献された上に、心に響く独自のメッセージを社会に度々発信し、大学と社会の繋がりを強められた。これらのご尽力と学内の方々の協力に、深い感謝と敬意を表したい。

総合大学が真価を発揮するには、哲学･数学から先端医療･環境政策・AIに至るまで、各領域で秀でるだけでなく、教員や学生が自身の専門領域を越えて相互に啓発し、学術全体を高めるために協業することが欠かせない。しかし、実際は、各領域での学びと研究だけで手いっぱいになりがちである。これに対し、山極総長はWINDOW構想を提起し、部局間、大学と社会、日本と世界の間の壁に窓を開き、WildでWiseな行動を促し、知の共同体に風を行きわたらせた。古都固有のNobleさも含め、この精神が継承され、発展することを期待している。

他方、協議会委員として、京大博物館の貴重な収集物、清風荘、大学病院、宇治キャンパス、新入生への英語での数学講義などを見学する機会を頂き、京大の研究・教育の多様性と厚みに加え、歴史的蓄積の豊かさに改めて驚かされた。京大の誇るフィールド研究とは比較にもならないが、現場に赴き、日々努力をしている当事者から話を伺うことの大切さを再認識した。 なお、 総長任期の最終年に、COVID-19や日本学術会議問題など困難な課題が続出しているが、大学関係者の知恵を総動員して、大学が社会との対話を強め、相互信頼の関係を築くことにより、真の解決の道が開けることを祈念している。

日本学術振興会理事長、元 国立大学協会会長

里見 進 さとみ すすむ

シルバーバックのような頼もしさ

京大総長としての6年の任期を無事に終えられたとのことおめでとうございます。また、この間、平成27年6月から2カ年間は国大協の副会長として私を支え、その後の2カ年間は会長として諸問題に対処いただき有り難うございました。

6年前にゴリラの研究者が京大総長に就任したとの記事を拝見して、私はすぐに随分前に読んだ立花隆氏の「サル学の現在」で、山極先生がゴリラ研究の若きエースとして紹介されていたのを思い出しました。 映画「猿の惑星」の影響で、チンパンジーは聡明で思慮深く、ゴリラは粗暴で残忍だと思いこんでいたので、ゴリラは草食性で通常はおとなしく、うまく接触すればあの恐ろしげなシルバーバックとも心の交流が可能であるとする山極先生の研究成果は、とても新鮮だったからです。

京大総長として初めてお会いした山極先生は、穏やかな包容力のある大物で、私はすぐに国大協の副会長をお願いすることにしました。

当時は大学の運営費交付金の毎年の減額を撤廃させる課題をはじめとし、教員養成・人文社会系のあり方に関する議論、国立大学の三分類とそれに則った重点支援、指定国立大学、入試改革の議論など問題が山積しておりました。運営費交付金の減額に関しては､国立大学振興議員連盟の設立など､我々の運動が功を奏して、平成28年度は前年と同額、翌年は僅かながらも増額に転ずることができましたが、他の課題は国立大学の根幹に関わる事柄でもあって、国大協の中でも議論が紛糾し、 会長である私自身が厳しい批判にさらされることも決して珍しいことではありませんでした。先生は私が返答に窮するときにはいつもひときわ重みのある言葉で発言し、バラバラになりそうな会議を何度かとりまとめてくれました。私にとっては群れの仲間を守るために戦う、シルバーバックのような頼もしい存在であったと今でも感謝しています。

先生が総長、国大協会長、学術会議会長から解放されたと聞いて、早速日本学術振興会の評議員会議長をお願いし、快諾をいただきました。今後とも宜しくおつきあいください。

シミックホールディングス株式会社代表取締役CEO
京都大学鼎会理事

中村 和男 なかむら かずお

山極先生ご退官にあたって

山極総長におかれましては、6年にわたる京都大学総長としての任期を終えられ、無事ご退任を迎えられたことに対し、心よりお祝い申し上げます。

霊長類研究の世界的権威であられる山極先生は、本学総長に就任され、斬新な教育改革をいくつも推進してこられました。その発想はどこからきているのかと質問してみたら、先生は「すべてゴリラから学びました」とお答えくださいました。先生が進められた数々の「おもろい取り組み」は、人間がどうあるべきかについて、長年にわたりフィールドワークを続けてこられた成果として、ゴリラ社会を通して堅固な理論体系を築いてこられた山極先生だからこそできたことだと思います。

独創的な思考は、これからの時代を生き抜くうえで必須の能力です。他人と違うこと、変なことというのは実に創造的なことが多く、前例や世間一般の常識にとらわれない変わったことを率先して始めようとする姿勢は、それだけで価値があることです。独創的な取り組みが奇異の目で見られてしまうようでは、創造性が停滞し、大きなイノベーションは起こせません。「変人講座」こそが、今の時代の教育に必要とされているのではないかと思います。

また、大きなイノベーションを生みだすには、広い視野で、別の視点から考えなおすことが必要でしょう。そのためには、異分野の人と交流し、多様な考えや意見に触れることです。私自身は、医薬品開発が専門ですが、社会に出てからすぐに製薬業界の知識だけに物足りなさを感じ、当時の日本にはなかった異業種交流会を立ち上げました。そこで得た知識や見識は、今でも私の礎となっています。山極先生が進められた「WINDOW構想」は、京都大学が特色として掲げている自由、個性の尊重などを盛り込んだ、まさにこれからの大学が必要とする指針であると思います。

末筆ながら、先生のご活躍、ご功績に対し、改めて敬意を表しますとともに、今後も研究者魂を発揮していただきたいと心から期待をしております。

大阪大学総長

西尾 章治郎 にしお しょうじろう

常に「がっぷり四つ」で輝いておられる山極先生

山極先生が京都大学総長に就任されてから、1年足らず後の2015年8月26日に大阪大学総長に就任して以来、ことあるごとに「西尾さん」と声をかけてくださり、近しくお付き合いをいただきましたことに、心より感謝いたしております。

京都大学総長に御就任以降、国立大学協会会長、日本学術会議会長などの要職を歴任されましたが、何時も直面した出来事から逃げない姿勢を貫かれてきた先生は、常に真剣に「がっぷり四つ」に取り組んでこられ、いつでもどこでも、山極先生らしい存在感を放ち、輝いておられました。

一方で、それ故に背負われている負荷の大きさやストレスは相当なものだろうと慮っておりましたが、このたび無事に任期を全うされ、我が事のように安堵しております。

山極先生は学生時代、京都大学でスキー競技部に所属されていたと伺って嬉しく思いました。実は、私の郷里は岐阜県の飛騨地方で、幼少の頃から冬は毎日スキーに明け暮れる「スキー少年」でしたので、思いもよらない共通点が見つかったからです。私はアルペンスキー専門でしたが、山極先生はジャンプもなされたと聞いています。

そして、そのスキー競技部の活動拠点は、「京大ヒュッテ」が建つ志賀高原だった、と伺っております。そのため、山極先生の興味や情熱は、スキーからだんだん志賀高原に現れる「猿」に移っていき、そして「ゴリラ」へと転じていった、というお話しを伺いました。確かに志賀高原は、温泉に入るニホンザルが見られることで有名ですが、何だか話がうまく出来過ぎていて、本当だろうかと思ったことがあります。今度お会いした時に直接お尋ねしてみようと思っています。

先生は、ゴリラとも「がっぷり四つ」で付き合ってこられ、その観察からゴリラのように『泰然自若』であることを座右の銘になされていると聞き及んでいます。私は、先生は既にその境地に達しておられるように拝察しておりますが、今後も学術、教育、社会におけるさまざまな活動において、『泰然自若』としたお元気なリーダーとしてお導きくださいますよう心よりお願いいたします。

大阪大学名誉教授
前 京都大学監事

東島 清 ひがしじま きよし

大学経営の山極モデル

山極総長の任期終了のひと月前まで４年５か月にわたり、京都大学の監事を務めた。監事として山極総長の大学経営を見守ってきた感想を述べたい。

前任の松本総長時代の急激な大学改革への反発の中で誕生した山極執行部は、京都大学構成員の理解を得ながら前執行部が提起した改革をほぼ成し遂げ、松本総長時代の政策を実施可能な形で継承したということができよう。山極執行部はWINDOW構想をはじめとする政策を、さながら水が高きより低きに流れるように実施できた。トップダウンの改革を押し付けるかわりに、執行部と部局との対話を重視し、部局の積極的提案には財政的支援をしたことに加え、プロボストをはじめする有能な理事を適切に配置した人事の妙によるところが大きいと思う。これにより、日本の大学に不足する英語による授業など教養教育の改革や若手教員雇用も実現した。

他大学の学長に真似できない個人的魅力の発信により、京都大学の存在感は大きくなった。本庶教授のノーベル賞受賞により京都大学の評判が一層高まったのは幸運だった。特色入試のポスターの「意欲買います」というメッセージは全国の意欲的な学生の注目を集めた。留学プログラム「おもろチャレンジ」や京大生チャレンジコンテスト等により、新しいことにチャレンジする学生を支援するという京都大学の姿勢を示すことにも成功した。野生的で賢い学生を育てたが、一方で女性教員と女子学生比率が低い水準に留まったのが少し残念である。

国立大学協会会長や日本学術会議会長に選出され、学術界における京都大学の存在感を高めた。国立大学全体のため文部科学省、財務省などと厳しく対峙し、国立大学や学術予算削減を食い止めるのに貢献した。ぎりぎりの間合いでゴリラと付き合った経験が役立ったのかもしれないが、心労は計り知れない。激務のためかこの６年間で白髪が増えたように感じる。しばしの休養を望む。

株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ取締役執行役会長
京都大学経営協議会委員、京都大学鼎会会長

平野 信行 ひらの のぶゆき

ワイルド＆ナチュラル、そして深い知の流れに

私が山極さんと出会ったのは「鼎会」という京大卒のビジネス・リーダーたちによる総長の応援団の幹事役を仰せつかったご縁によるものだが、それは本当にラッキーだったとしか言いようがない。以前から「アフリカのジャングルでゴリラと一緒に暮らした風変わりな霊長類研究の第一人者」という認識は持っていたが、その程度。それが、さまざまな機会を通して、大学のありかたに対して山極さんがどんな考えを持っておられるかを知り、ご専門の研究については分からないままだが、京都という世界でも他に類のないワンダーランドに生まれた西田幾多郎や今西錦司という巨人たちに発した深い知の流れの中に身をおく存在だということを知るに至って、共感と少しだけ嫉妬の入り混じった尊敬の念を抱くようになったからである。

まず、山極さんが総長就任に際して掲げたWINDOW構想が気に入った。最初のWはWild and Wise、NはNatural and Noble。一見矛盾するような概念が平気で同居しているところが魅力だし、デジタル化に突き進む現代への警告でもある。それ以上に気に入ったのが、東京育ちの山極さんも最初戸惑ったと書いておられる「おもろい」というキーワード。大学とは正解が見つかっていない、或いはそもそも正解のない問いに挑むことを学ぶところだというのは、それが実現できているかどうかは別として、VUCAの時代に望まれる人材といった脈絡で誰もがいうことだが、それが「おもろい」という五感に訴える言葉と結びつくと様相が変わる。新たな発見や知を創造するためには、はやりのクリティカルシンキングだけじゃダメなんだという警告のように思われた。

でも、心から感謝しているのは、私のような落第生に先程述べた知の流れを探索する扉を開いてくださったことだ。今頃になって、「善の研究」や「生物の世界」そして「文明の生態史観」を紐解くことになろうとは！

山極さん、これからもワイルドでナチュラルな世界から世の中を導いてください。

株式会社ブロードバンドタワー代表取締役会長兼社長CEO
京都大学鼎会理事

藤原 洋 ふじわら ひろし

山極壽一前京都大学総長との思い出

私は、科学者を目指し宇宙物理学を専攻しましたが、コンピュータに興味が移り、卒業と同時に激しく変化する業界に飛び込みました。大企業での修行を経て、42歳でインターネット分野で起業し創業後3年で東証マザーズ第1号上場を果たしました。すると同級生で理学部附属天文台長の柴田一成君が、久々に電話をしてきて直径3.8mのアジア最大の天体望遠鏡を岡山に建設する資金を提供して欲しいとのこと。話を進めるうちに、私の会社にわざわざ当時研究科長の山極先生が、お見えになり、ゴリラの肖像画入りの名刺を出され、理学研究科のために是非資金支援を宜しくとのことでした。その時こそ、霊長類研究者として道を究められた迫力と共に、「科学への愛」に心を打たれた瞬間でした。時を経て2019年『せいめい望遠鏡』開所式に参列しました。そこには、思いがけぬ「藤原洋氏への感謝」という銘板が貼ってありました。こちらこそ山極先生と「科学への愛」を共有させて頂いたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は、鼎会（会長か社長だけに会員資格がある京大OBの財界同窓会）の理事会メンバーで、その会が支援する分野連携の「学際研究着想コンテスト」で、私は、山極先生と6年間審査委員をさせて頂きました。その研究者と経営者から成る審査委員会の議論は、とても興味深いものでした。経営者は、早期の結果を求めがちですが、山極先生の判断基準のキーワードは、「オモロイ」でした。実は、企業経営にも通じる極めて重要な概念だと感じました。

2020年初頭、私の会社も20周年を迎え、通信キャリア3社の社長等経営者と共に、山極先生にご登壇頂き、オモロイ話と「・・・いまだに藤原さんは昔の夢を諦めずに、日本の青少年たちに夢を与えていただいている。・・・」とエールをもらいました。WINDOW構想は、1文字に2つの計12文字の短縮ですが、12文字に共通する「オモロイ」という価値観と共に未来を見続けたいと思います。

株式会社堀場製作所代表取締役会長兼グループCEO

堀場 厚 ほりば あつし

山極先生の京都大学総長ご退任に際して

山極前総長とお近づきになったのは、2015年5月に京都教育懇話会が主催する京都教育創造フォーラムでご講演いただいた時に始まります。

ダイバーシティをテーマとしたフォーラムでしたが、霊長類のご研究から「共感」は人類だけが持つ特性で、「他者に共感する力」と「他者を共感させる力」が教育の基本だというお話に感銘を受けたことを思い出します。

その前年に総長に就任されたばかりでしたが、研究室の方々が山極さんと一緒に研究を続けたいとのおもいから、総長になることを止められたというお話をお聞きし、さもありなんと感じました。また、総長として「おもろいことをやろう」と皆に語りかけられており、わが社の社是である「おもしろおかしく」にも共通する考えをお持ちであることを嬉しく感じたことも印象深く思い出されます。

その後も山極さんとお話しする機会は多く、お会いする度に熱くお互いに語り合い、多岐に亘る意見交換をさせていただきました。2018年の初めに「企業の『知』とアカデミアの『知』を共鳴させて、真の産学連携を京都で興そう」との考えを山極さんと提唱し、その年の春に共同発起人として、京都の主だった企業の経営者と大学の学長の会を立上げました。この会はその後、日本では珍しい、企業と大学のトップが想いをぶつけ合う、楽しくも意味深い、まさに「おもしろおかしく」の場として育っています。

優しい眼差しとソフトな言葉で、厳しく本質を突いたお考えを常に披露される山極さんのリーダーシップにより、この会合は人材育成とイノベーション創出を目的とした真の産学連携を目指すグループに成長しました。本格的に活動を開始してこれからというタイミングでのご退任となりましたが、引き続き顧問としてご参加いただけることになり、一安心しています。

山極さんの今後益々のご活躍を祈念し、また、これからも変わらぬご厚誼を賜りますようお願いして私の贈る言葉とさせていただきます。

京都信用金庫顧問
前 京都大学経営協議会委員

増田 寿幸 ますだ としゆき

猛獣は何処に？

山極壽一総長は、総長就任時に、京大をジャングルに、その構成員を猛獣に、そして自らを猛獣使いに喩えて決意を示しました。総長としての決意を猛獣と猛獣使いの関係で語るとはゴリラ社会を通して人間社会を見つめてきた人類学者ならではと思ったものです。

ところがまもなく山極総長は京大の外にもっとやっかいな猛獣たちがいることを思い知らされます。毎年大学の運営費交付金を減額し大学ごとの実情を鑑みない一律の制度改正を押し付けて来る文科省や財務省のライオンたちに比べれば、キャンパスの京大ライオンたちは猫にすら見えたかもしれません。さらに国大協の会長、日本学術会議の会長などを兼務するにつけ、霞が関ライオンたちの後方には、よりやっかいな永田町ゴリラや経団連タイガーなどが生息することも知らされたことでしょう。こうした環境に6年間総長としての激務を見事に完遂されたことを心より敬服申し上げるものです。

さて、最近は、日本学術会議の会員任命問題が関心を集めています。山極会長の在任期間にこの問題が表面化しておれば事案の展開が少しは異なったものとなったかもしれません。それにしても気になるのは、科学者と永田町の対立という構図に対し、それを見る一般国民の感覚というか世論にどこか冷ややかなものが漂うような気がすることです。世間はアカデミアを無条件に信頼し応援するわけではないのです。いつの間にか科学や学問へのリスペクトが相当に劣化しているようです。これは欧米諸国で感染学者の推奨を露骨に無視する政治家を多数の民衆が支持するという風景に似ているように見えます。現代社会は、アカデミアにとっては、まわりはみんな猛獣だらけという社会なのかもしれません。ならば、ここは、希代の猛獣使い、山極壽一博士に、さらに縦横に活躍してもらわねばならないのだと思います。

多機能フィルター株式会社代表取締役社長
前 京都大学監事

丸本 卓哉 まるもと たくや

山極総長への感謝とエール

平成26年(2014)4月から令和2年(2020)8月まで、6年5か月間にわたり、京都大学の監事を務めさせていただきました。この間、大禍なく、無事退任する事ができましたのは、ひとえに山極前総長、理事・副学長の先生方、および秘書室や担当事務の皆様のご支援、ご協力があってのことと、心より御礼申し上げます。私の任期は山極前総長の任期とほぼ同じで、京都での忘れられない6年間となりました。

私の監査業務を通して強く感じた事を2、3述べてみますと、1) 京都大学の組織の大きさ、研究・教育施設の充実していることに驚き、高く評価したこと、2) 総長および理事・副学長の先生方の高い業務力に感心したこと、しかしながら、3) 研究・教育の素晴らしさに比較して、学生に対する支援や指導が充分ではないと感じたこと、などが挙げられます。京都大学での6年間の監査業務は、私にとって本当に有意義で、大変貴重な体験となりました。

山極前総長は、 総長着任直後よりWINDOW構想を打ち出し、京都大学の教育・研究に新しい風を吹き込むとともに、その実行に全力で取り組み、多大の成果を上げられました。他方で、国立大学協会会長、日本学術会議会長および各種の委員会委員などを兼任されて、我が国の学術の発展に貢献してこられましたが、この間のご苦労は並大抵では無かったものと推測されます。

総長退任後は、新たな仕事に就かれると伺っておりますが、コロナ禍もまだ続くものと思われますので、くれぐれも体調管理に気を付けられて、日本と世界の学術の発展に貢献されることを、心より祈念しております。

三菱電機株式会社特別顧問
前 京都大学鼎会会長

山西 健一郎 やまにし けんいちろう

山極先生の遺産を糧に

山極壽一先生におかれては、2014年10月から6年間の長きに亘り、京都大学総長の重責を果たされ、この度ご退任となられた。そのご功績に対して深く敬意を表するとともに、長年のご尽力に厚く感謝申し上げたい。

京都大学出身の経営者が集まり、時の総長を物心両面から支援する「鼎会」という組織がある。山極先生が総長にご就任された後、この鼎会の会合でお会いしたのが、山極先生との出会いであった。ゴリラ研究の第一人者ということは、予めお聞きしていたが、正直に言えば、どんなユニークな方であろうかと、興味津々で会合に出席した覚えがある。

その後、光栄にも鼎会の会長を仰せつかることとなり、山極総長とも親しくお話する機会に恵まれた。こうしたお付き合いを通じて感じたのは、山極総長が、ゴリラ研究を通じて培われた確かな人間洞察力、そして社会に対する高い見識をお持ちであることであった。加えて、産業界にも深い理解をお示し頂き、お話をしていて時が経つのを忘れることも、しばしばであった。

山極総長が在任中に残された遺産は枚挙にいとまがないが、その一つに「おもろチャレンジ」というプロジェクトがある。先ほど触れた鼎会が支援をしている活動であるが、ユニークな発想もさることながら、この企画の根底には、若者にチャンスを与え、若者の良さを伸ばしたい、という山極総長の熱い想いが込められている。参加した学生諸君が、いずれの日にか、山極先生の想いを体現して、大輪の花を咲かせてくれることを願っている。

産業界としては、現在「Society 5.0 for SDGs」の実現を推進しており、そのためには「産・学・官」連携による「イノベーション・エコシステム」の社会実装が大きなテーマとなっている。京都大学に関係する皆様それぞれのお立場から、より良い社会の実現に向けて、こうした取り組みにご助力頂ければ幸甚である。

山極先生の残されたさまざまな遺産を糧として、京都大学が研究・教育の両面で、今後ますます発展・貢献していかれることを大いに期待したい。

元 大阪大学総長、大阪大学名誉教授、京都市立芸術大学名誉教授
前 京都大学経営協議会委員

鷲田 清一 わしだ きよかず

山極さんの一身

わたしはかねがね、国立大学の学長という存在に、「リーダーシップ」というのはそぐわないと思ってきた。学問は、社会の当座の利害から一定の距離をとって、むしろ人類史的な広い視点から未来の社会のありようを考え、また過去に学びつつ、この世界の真理と社会の指針を探し求めるものだと考えてきた。学問というのは幾多の研究分野がその長い歴史を背負いつつ、それぞれにそれなりの手法で探究すべきものであって、その意味で学長というのは、それを応援する「応援団長」であり、それを社会にきちんと理解してもらうための「広報部長」であり、その自由を時々の権勢から護る「守護人」である。研究者とそれに学ぶ若者、さらには彼らを支える事務職員の日々の仕事の全体を、後方からしかと見つめ、支える、いわば「しんがり」の役を務めるものと考えてきた。

そういう視点からすれば、山極総長はそれぞれの役をほんとうによく果たされたとおもう。彼の敬愛するゴリラとおなじく、喜びも哀しみも怒りも、静かに、そして深く、だが明快に表現する「明るい」人であった。

任期中には、同時に、日本学術会議会長ならびに国立大学協会長も務められ、京都大学という、日本の学術と高等教育を代表する機関の一つが果たすべき重大な責務も、しっかりと担われた。このことで「学問と自由の府」としての京都大学の存在感もこの時期、飛躍的に増したようにおもう。

ただそこにかけた時間は並大抵のものでなく、その点で、足許の大学運営に全精力を注ぎえなかったことは、総長としては忸怩たるものがあったのではないかと想像する。体がいくつあっても足りない、そんな6年間であったろうと想像する。そのことをも含めて、総長就任時に口にされた「泰然自若」をずっと（ゴリラに学びつつ？）おのれに言い聞かせてこられたのだとおもう。

だが、そのような志と能力をもつ氏だからこそ、これからも社会と学問をつなぐ役を担ってほしいし、またこの6年間封印してこられた自身の研究にもこれからは思う存分取り組んでもらえたらと希う。学問は、いのち果てるまで綿々と続く仕事であろうから。